

人の心を豊かにする地域おこし

—広島県三次市「卑弥呼蔵」の活動事例から—

松村 薫子 *

MATSUMURA Kaoruko

Satisfying Local Revitalization

Case Study of “Himiko-kura” in Miyoshi City, Hiroshima

Rural revitalization is often undertaken in Japan. However, the quality of life of the residents of these areas isn’t often taken into account.

I am currently studying the case of “Himiko-kura”, a local revitalization group which is revitalizing the area of Miyoshi-city, Hiroshima by preserving an old Japanese-sake brewery.

My primary focus is this action group, especially their president. This study considers rural revitalization through the specific lens of “Himiko-kura”. Based on the success of “Himiko-kura” in raising the standard of living in Miyoshi, this study can teach us a lot about future possibilities.

キーワード：地域おこし 地域活性化 心おこし

* 国際日本文化研究センター研究部

はじめに

現在、日本の各地域では、地域活性化のために、様々な地域おこし活動が行われている。地域おこしは、高度経済成長にともなう人口の都市部への流出で地方再生が課題となり、「全国総合開発計画」（1962年）や「ふるさと創生事業」（1989年）等の様々な国の施策の下で各地域において盛んに行われるようになった。これらの政治的課題のもとで行われる行政主導の地域おこしに対して、批判的に検討する研究や地域住民の自律的な地域おこしへの提言が行われてきた。神崎宣武は、行政の経営感覚のない地域おこしや補助金があるから地域おこしを考えるとといった姿勢を批判し、住民自らが地域おこしを行うことの重要性について述べた〔神崎 1988; 1996a; 1996b〕。また、清成忠男も、地域住民が自ら地域振興を行うことの重要性について述べている〔清成 1987〕。

行政主導の地域おこしの問題点や地域住民による自律的な活動の重要性が述べられるなかで、地域住民が自律的に行う地域おこし活動の現状や今後の課題について考察する研究〔槇村 2000; 井上 2002〕や、地域活性化につながる地域おこしの方法や実践についての研究が行われるようになった〔守友 1991; 森 1996; 堀 2013〕。

また、「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」（1992年）や「観光立国推進基本計画」（2007年）のような国を挙げて観光を推進する流れのなかで、観光地域おこしについての事例研究や経済的効果についての研究が行われてきた〔西村 2009; 角本 2011〕。観光地域おこしの経済的効果などの利点が喧伝されるなかで、文化財や民俗芸能を観光資源として地域おこしを行うことについての議論がなされ、文化ナショナリズムのもとで観光地域おこしが行われてきたことによる弊害についての批判的検討も行われた〔岩本 2003; 2007〕。

これまでの地域おこし研究では、行政主導の地域おこしの弊害や、地域住民が自律的に地域おこしを行っている事例の現状や今後の課題、効果的な地域おこしのあり方などが主に考察されてきた。ゆえに、それらの議論の先にある「地域住民が充足する地域活性化の姿」はどのようなものなのかという点の考察は今後の研究課題として残されている。これらを考察するためには、自律的な地域おこし活動における地域活性化について、聞き取り調査を中心とした考察が必要であると考えられるが、そのような論考は少ない。徳島県名西郡神山町で地域活性化のためにキャンプ場をつくった人物に聞き取り調査した研究においても〔渡辺 1992〕、聞き取り内容からの具体的な考察には至っていない。今後は、「地域住民が充足する地域活性化の姿」について考えるために、「地域住民の地域おこし活動への考え方」や、「地域おこし活動が周囲の人々へ与えた具体的な影響」を聞き取り調査しながら個別事例ごとに考察を深める必要があるのではないだろうか。

そこで、本研究ノートでは、広島県三次市で古い酒蔵を保存して地域活性化の拠点づくりを目指す「卑弥呼蔵」の活動事例を聞き取り調査から考察することを通して、地域の人々が充足する地域活性化の姿について考えてみたい。

1. 「卑弥呼蔵」の地域おこし活動の概要

広島県三次市は、広島県の県北、中山間地域に位置し、鵜飼と山頂から見える霧の海で知られる地域である。人口は、2015年6月1日の時点で、54,936人である。全国的な傾向と同様に、高齢化や若い世代の都市部への流出が進んでおり、人口は年々減少している。

このような状況のもと、三次市を活気のある町にしたい、人が多く集う町にしたいという思いを持った有志の住民たちによる自律的な地域おこし活動がいくつか行われている。その一つが「卑弥呼蔵」の活動である。「卑弥呼蔵」は、三次町のみよし本通り商店街に建つ古い酒蔵を再生、保存し、地域活性化の拠点とすることをめざし、地域おこしを行っている団体である。卑弥呼蔵の主宰者である宇坪涼美さんは、かつて三次駅前に「喫茶卑弥呼」というカフェを30年間営んでいたが、三次駅の駅前開発による立ち退きにともない、新たな建物を探していた。その際に、三次町のみよし本通り商店街の中に、かつて「万寿之井酒造」の酒蔵であった古い建物を見つけた。この酒蔵は、540坪ある敷地に大小の蔵がコの字型で建っている大きな酒蔵である。この古い酒蔵の建物は、もとは江戸時代から続く建物である。江戸前期に「紙蔵」として使われていたことが、古地図から確認されており、江戸後期には、西城川から水運で運ばれてくるたたら貯蔵倉として使われたという。そののち、「万寿之井酒造」という酒造会社が1880年から2003年まで酒蔵として使っていたのである。蔵のなかは麹菌で黒く汚れた壁となっており、また、蔵の外には、酒米を蒸すときに使われていた遠くからみえる煙突があるなど、建物のあちらこちらに江戸時代からの建物の変遷の跡がうかがえる。「万寿之井酒造」は、「三次で一番古くて旨い酒」といわれ、三次の酒として地元住民に愛されていた酒造会社だった。しかし、宇坪さんが購入する3年ほど前に「万寿之井酒造」は酒造業を撤退し、130年間続いた酒蔵は製造の道具類を放置したままの状態で廃墟と化していた。酒蔵は雨漏りもひどく、屋根も内部の壁もすべて荒れ果てた状態で、少し手入れを少ししただけではとても使えるようなものではなかった。取り壊した方が早いぐらいの状態であった。しかし、宇坪さんは、この廃墟と化した酒蔵を見たとき、誰も訪れなくなって放置されている古い蔵が、悲しんでいるような感覚を覚え、この酒蔵を取り壊してはいけないという思いにかられるようになったという⁽¹⁾。なぜこのような感覚になったかという、幼少期の習慣がもととなっているのではないかという。宇坪さんは子供の頃、祖母の家の前に神社があり、地域に存在する神社で拝む習慣など、目にみえないものに対する畏敬の念があり、蔵を見たときに、三次に古くからある蔵は三次という地域に大切なものであって壊してはならない、何としても残さなければならないという意識が騒いだのではないかという⁽²⁾。

そこで宇坪さんは、この酒蔵を買い取ることに決め、2006年8月に購入した。そしてこの古い酒蔵を「卑弥呼蔵」と名付けた。宇坪さんは、古い酒蔵を買い取ることと同時に、酒蔵の再生と活用を目指すこととなった。しかし、「古い酒蔵を残す」ことは実際にやってみると大変で、「全身全霊を使って、すべての資金を用い、人の力をたくさんもらって、何もかもフル稼働せねば、維持できないものとは予想以上だった」⁽³⁾という。

宇坪さんがよく述べる「蔵を残すには一生かかり蔵を壊すのは一瞬でおわる」という言葉どおり、敷地が540坪ある酒蔵の土地と建物を、消防法等の基準に従って修繕・維持するのは、約1億円の莫大な費用を要することで大変なことである。また、建築基準法や用途変更に関する法

律の壁などもあり、なかなか思うように物事が進んでいかないという。「卑弥呼蔵」は、宇坪さんが「蔵を残したい」という思いで個人的に買い取った蔵であったが、個人の資産や努力だけでは蔵を修繕して残すことが困難な状況であった。

しかし、宇坪さんは、三次に古くからある蔵を残すために、少しずつでもいいから自分たちの手で修繕し、保存しよう、そしてこの蔵を三次の活性化の拠点としていこう、ということを考えてようになった。そのような宇坪さんの「蔵を残したい」、「蔵を拠点として三次を活性化したい」という強い思いに賛同する人々が次第に集まってくるようになった。

当初、蔵の内部には、酒造業の大きな機材、杜氏たちが使っていた道具、割れた瓶のかけら、酒造業には関係のない私物など、いろいろなものが散乱し、そのまま放置された状態であった。まずは、内部の物を一つずつ取り出すことから始めた。しかし、重い機材やコード、ありとあらゆるものが散乱していたため、内部の物を取り出すだけでも長く時間がかかり、取り出し作業が連日続いた。特に大きな機材などを取り出すのは本当に大変であったという。蔵の内部からすべての物品を取り出し、見やすい状態になるまでに2年以上かかった。屋根や壁、床板の修繕もすべて自発的に集まった人達で行った。

このような蔵の保存活動を行う中で、自発的に活動に参加する人が1人、2人と増えていった。あらゆる年齢層、性別、職種の人が蔵へ訪れるようになり、蔵の修繕や掃除、イベントなどの協力を行うようになった。多くの人々の協力により、蔵は最初の頃と比べると、年々整備が進み、2015年現在では、蔵の中が歩きやすい状態になっている。

宇坪さんは、蔵の補修を行うのと並行して、蔵の存在を多くの人に知ってもらうために、「蔵プロジェクト」というイベントを2007年から年1回行うことにした。「蔵プロジェクト」は、現在までに8回開催されている。蔵プロジェクトは、蔵の全体を使って、出店を行ったり、ライブなどを行ったりと、学園祭のようなイベントとなっている。また、2012年からは、月1回の「赤猫市」と「赤猫ライブ」を行っている。赤猫市は、そば屋などの出店があるほか、コスプレマニアの人々が集まり、撮影会を行うイベントとして定着してきている。「赤猫ライブ」は、プロのミュージシャンも時に出演し、人気を集めている。また、蔵の敷地内に建っていた1926年築の建物を改造して2010年に「卑弥呼蔵 赤猫」という飲食店をつくり、多くの人が気軽に立ち寄れる場をつくっている。飲食店内には、「蔵の見学ができます」という張り紙があり、訪れた客が自由に蔵を見学することができる。また、2011年秋には、赤猫の隣に位置する、昔の杜氏の宿泊場を改築して、「寝床と学び舎 青猫」という宿泊施設もつくった。この宿泊施設は、蔵のなかで人々が学ぶ場をつくり、蔵で過ごす時間を楽しんでもらいたいという思いから建てられたものである。

蔵は、有志の人々によって保存活動が進められてきたが、2011年からは、「旧万寿の井酒造跡を残そう」という動きが、みよし本通り商店街の人たちを中心に進められるようになってきた。近所の人たちは、かつて万寿の井酒造があった頃、早朝から聞こえる杜氏さんの歌声や、「おけ」の木の音で目覚めたという。子どもの頃、蔵の敷地に入り込んで遊んだという話も近所の人々から聞いた。蔵は、地元住民の人々にとっては日常生活に馴染みの深い存在であり、三次の人々の記憶に残る蔵で保存を願う人が多い。現在では、蔵を残す活動は、地元住民の人々にとっても共通の目標となってきているのである。

2. 主宰者の地域活性化の目標と人々が活動に集まる理由

主宰者である宇坪さんの考える地域活性化や地域おこし活動の意味は、いかなるものであろうか。宇坪さんは、地域活性化の目標について下記のように考えている。

三次町にも、江戸から昭和時代までは肩がぶつかるぐらいに通りに人は波があったと聞く。町から出ていく人を引き止めるより、町にあるものを活かし移り住みたい町にするのが長期の目標である⁽⁴⁾。

宇坪さんは、三次に昔からあるものを活かして、三次の人が楽しく生活し、他所の人が訪れたとき、それをみて住んでみたいと思えるような町にしたいと考えている。それゆえ、三次に古くから残る蔵で、人々が楽しいと思える拠点づくりを行いたいと考えているのである。宇坪さんに、蔵をどのように活用して地域活性化に活かしていきたいのかについて聞いた。

天の岩戸方式で、中で踊りよったらちょっと見てみたい、「開けてみにゃいけんじゃろう」っていう状態にしたい。踊り狂う人をたくさん私は集めるのが仕事だと思う⁽⁵⁾。

宇坪さんは、蔵を楽しい雰囲気のある場所にしていけることが、三次の活性化につながると考えている。それを実現するために、様々な人を蔵に集めるのが自分の仕事だと考えている。そして蔵を訪れる多くの人が気軽に話ができて、楽しめる場所にしたいという思いを持っている。宇坪さんは、もともとコミュニケーション能力が非常に高い人であるが、多くの人と楽しく話をするためには、多くの知識を蓄えておかないと深いところまでの話ができないという思いから、毎日さまざまな勉強を欠かさない。そのような事前準備を日頃からしておかないと蔵を訪れた人が楽しく話ができないと考えている。このことは普段人に話すことはなく密に行っていることだが、宇坪さんの周囲には、常に人が集まっており、この幅広い人脈が「卓弥呼蔵」の地域おこし活動の源となっている。

蔵に寄って本当のことがしゃべれるとか（よく言われる）。みんな本当のことはべつに隠さなくてもええことなんよ。じゃけど、変に曲解たりするけえ、隠さないけんようになるわけ⁽⁶⁾。

蔵に来る多くの人が「蔵では本音を言える」といい、悩み事や自分の考えている思いを話すそうである。社会の中では、皆、誤解を恐れてなかなか本音が言えないが、蔵に来ると変に誤解されず自分の考え方が受け入れてもらえる、という安心感などから本音が言えるそうである。宇坪さんは、皆が本音を言いやすく、居心地良くいられるようにという点についてはさりげなく配慮をしているという。その配慮が、訪れる人々にとっての安心感や居心地の良さにつながっている。

このような蔵の居心地の良さから継続して来るようになった人々が活動に参加している。活動参加者が蔵へ何度も来る理由についてのアンケート調査を行ったところ、「ホッとすると、そして

楽しい」「自分が出せる場所であり、生活の一部になっているから」「みんなでほっこりできる。いつのまにか、知らない人と話をしてしまう空間」などの回答がみられ、ほっとする場所で自分らしくいられて楽しいと感じることが繰り返し来ることにつながっていることがわかる⁽⁷⁾。

宇坪さんは、蔵を訪れた人で蔵保存の意義を理解してくれる人に、蔵で必要な手伝いをお願いしている。蔵には、保育士、主婦、学生、画家、歌手、職人、会社員、教員、カメラマン等の様々な職種、年齢の人々が訪れるが、その人の得意なことや興味のある範囲での手伝いを依頼する。例えば、画家の人には、蔵プロジェクトで使用する看板の絵を描いてもらうなどである。依頼する手伝いは、大きな負担にはならない程度のものであり、宇坪さんとの関係性が築かれていることもあるので、多くの人は手伝いを引き受ける。そして手伝ううちに楽しくなり、継続して蔵の様々な活動を行うようになっていく。活動になぜ参加するようになったのかについてアンケート調査を行ったところ、「皆さんが一生懸命に活動された顔を見て、自分に出来ることをしたいな…と思ったのがきっかけです」「蔵の再生は面白いと思ったから」「気に入ったから」などの理由がみられる⁽⁸⁾。活動者が楽しく活動している姿を見て自分も参加しようと思ったというのが活動に参加するきっかけとなっている。

そして、宇坪さんは、来る人と自分が話すという関係性だけではなく、蔵を訪れた人同士がそれぞれ自然に出会いを楽しみ、人生や心を豊かにすることができる場所にすることを意識的に考えて行動している。人生や心を豊かにするという点については下記のように考えている。

みんなそれぞれが、自分をこの蔵っていうフィールド、湖みたいな自分の姿がうつる場所があって、それで自分の姿をみて、社会でまたスキルアップというかそういうのができる（場所にしたい）。それは金儲けと直結するんじゃないに、楽に生きる、楽しく生きる糧になるんじゃないかと思うわけよ。社会の中で楽に生きる糧に。楽しく生きるいうたらいいんかな⁽⁹⁾。

宇坪さんは、蔵という場所を、訪れる人が自分の姿を見つめて考える場所にしたいと思っている。そのような場所となれば、訪れた人々の心が豊かになり、それぞれの日常生活で楽しく楽に生きる糧となりうるのではないかと考えているという。

蔵で活動を行う人々に、活動で得られたものについてのアンケート調査を行ったところ、「すばらしい出会い」「出会いが増え、楽しみが増え、素敵な思い出が出来たこと」「関わった方々みな温く、良い交流ができた」「自分自身も力になれると知った」「自分1人の力がどれだけか、1人の力だけでは、出来なくても、集ると大きな力で楽しいと思った」「物事に対する考え方に変化（幅広く見えるようになった？）があった」「いろんなことが楽しいと感じられるようになった」「色々な人のつながりと、人の気持ち」「諸経験、人の仕事や担当作業を見てみると、いろいろ参考になるので。あとは、人脈等…」などがみられた⁽¹⁰⁾。蔵での地域おこし活動を行うことにより人との出会いで良い交流ができ、自分自身の考え方などに影響を受けていることがわかる。

しかし、宇坪さんは、なぜ古い酒蔵を使ってこれらのことを行う必要があると考えているのだろうか。古い酒蔵で地域おこしを行うことの理由についての考え方を聞いた。

ここの蔵の意味というのは、「教育」っていうのがあるわけ。「教育」というのは後に伝えるってことよね。後世に伝えるって、そのものをね。その意味をなしていくのが私ここじゃ思うとる。それを除いてはね、残しても必要がないわけよ。（中略）禅宗の教えっていうのは「逆

らわん」教えよね。なくなろうとどうしようとね。ほんなら、一個人でどうしてこの蔵を残さないといけんのかと思ってしまうわけ。禅宗からいったら、なくても精神が残ってればええわけよ。ただ、なくても精神が残とりゃええけど、形がないものは忘れるんよ、人間は。器がなくなると忘れるんよ。それが一番の弱点かなって思う。じゃけえ、その器を残しとかんと話にならんわけよ。（中略）（蔵保存の大変さを）体感して「いやぁ大変ですね」って言葉がでるのも、体感するけえ、ここで歩くけえ⁽¹¹⁾。

宇坪さんは、蔵が「三次に昔からある蔵」であるという点を非常に重視している。三次の人々の記憶に残る「昔からある蔵」という建物だからこそ、地域の人々を過去から未来へつなぐことのできる「器」となりうるのだと考えている。つまり次世代の人たちに地域のことや地域の人々の考えや精神性など、様々な生きた「教育」を伝えるための形ある「器」として、蔵を保存し、活用する必要性があると考えている。また、三次に歴史的に根付いてきた蔵だからこそ、三次の自然と歴史を体感できることが多くあり、「教育」するための器として保存活用する必要性があるのではないかと考えているのである。このような考え方のもと、三次の歴史とともに歩んできた蔵を残し、「教育」する場をつくることで、人々がここで学び、人生におけるさまざまな自分の糧となるものを得て、それぞれの人生において活かしていく。それこそが楽しく充実した生活につながることであり、本当の地域の活性化につながることでありと考えているのである。宇坪さんは、このような考えのもとで蔵の保存を多くの人々と共に日々努力している。

3. 活動参加者への影響—Nさんの事例

活動者は、「卑弥呼蔵」の活動からどのような影響を受けているのであろうか。それについて考えるために、蔵の大屋根を修繕したNさんの事例を取り上げ、活動から受けた影響について考察する⁽¹²⁾。

Nさんは瓦職人である。Nさんは、京都で瓦職人として10年働いていたが、仕事が忙しすぎたことで、30代になってから心身ともに疲れ果ててしまい、仕事を辞めて、故郷の広島へ戻り工場に勤務していた。その工場での仕事は、タービンを運搬用に箱詰めする仕事であったが、瓦職人ほど打ち込める仕事でもなかったこともあり、工場の仕事を辞め、知人に声をかけられたのがきっかけで有名アーティストの運転手のアルバイトをしていた。Nさんの趣味は、旅行しながら各地を回ることであったが、たまたま回っていたときに卑弥呼蔵の前を通りかかったという。その時、卑弥呼蔵の大蔵の屋根に人が上がって作業しているのが見えたので、何をしているのかを聞いたところ、「大蔵の屋根の雨漏りがひどいので直そうとしているが、お金がないので自分たちでやっている」ということだった。そこで、「雨を止めるぐらいだったらやってあげるよ」といって、屋根に上がって状態を見てみることにした。Nさんが屋根をみたところ、屋根の葺き替えは昭和初期に行ったものであり、野地板から腐っていたので全部やり直さなければならないということがわかった。Nさんは、一言、「やりましょか」といったという。なぜそのとき、屋根を自分がやろうと思ったのかについては、屋根の状態から、このまま放っておくと建物全体がやられてしまうと思ったので、見過ごすことができなかったという。

そしてNさんは、8月中旬から泊まり込みで連日瓦を葺く作業を行うことになった。しかし、

当時の卑弥呼蔵は、電気やガス、水道がひかれておらず、人が寝泊まりするのには厳しい環境下にあった。かろうじて井戸から水がとれるようになり、酒蔵で使っていた水なので、水は美味しく飲めたが、正直寝泊まりできる状況ではなかったという。建物もすべて修繕できていない状況で老朽化していた。大蔵のとなりにある酒蔵時代に職人が寝泊まりしていた建物で寝ていたが、古い建物であり、夜などは一人でいるのが怖いぐらいであった。

約5か月が過ぎ、約120坪（約360m²）の屋根の葺き替えが完了した。宇坪さんによれば、Nさんの連日の熱心な作業は目を見張るものがあったという。瓦の葺き替えは暑期中、本当に大変な作業であり、全くのボランティアでは申し訳ないという思いがあったので、宇坪さんがお礼をしようとした。しかし、Nさんは「ええですわ」と断ったという。なぜ断ったのかについては、「自分でもなぜそうしたのかよくわからない」ということであったが、「屋根はほっておいたら確実に雨が入り込んで建物全体が悪い状態になってしまうことは目に見えていたので、瓦職人としてほっておくということができなかった」という。Nさんは瓦を葺くということに並々ならぬ情熱を持っている人であり、聞き取りの際にも自らが手掛けた寺院などの瓦の話が多くでてきた。Nさんは、「瓦というものは、50年～100年もつ。自分の仕事が刻まれることであり、自分で納得のできる瓦ができることはまずない。どうやったら納得のいく瓦をやれるのか、常に考えている」という。一度現場で瓦をやりだすと瓦のことばかり連日考えるため、「おそらく結婚などすれば、相手をほっておく時間が多くなり、うまくいなくなるだろうから結婚はしない」ということであった。Nさんの話を聞いていると、骨の髄まで瓦職人であることがわかる。

Nさんは、屋根の葺き替えが終わってから、もといいた瓦職人の会社へ戻ることにした。なぜ、一度辞めた瓦職人に再び戻ったのかについて聞いたところ、「大蔵の屋根を毎日やっていて、やっぱり自分が情熱をもって打ち込めるのはこれしかないと思ったから」だという。蔵で作業をして影響を受けたことについて聞いてみたところ、「蔵では遊ばせてもらったからねー」という回答が返ってきた。瓦職人は、十分な時間をかけて瓦を思い通りに葺くことは通常は難しいという。普通は、納期や費用のバランスをみて瓦を葺くので、納得がいかなくても納期に仕上げなければならない。瓦職人が、心から納得がいくまで瓦をやっていたら時間も費用も莫大にかかるので、ある程度納得できる範囲で仕上げるものだという。ゆえに、大蔵の瓦を葺いたときは、心ゆくまで自由に楽しく瓦を葺くことができたということである。

「蔵で遊ぶ」という表現は、宇坪さんからもしばしば聞く言葉であり、「みんな蔵で遊んでるんよ。遊びやすい状態をつくるのが私の役目」であるという⁽¹³⁾。蔵で行う活動は、「蔵のなかで自分の好きなことをしたりやりたいことを行って自由に遊ぶ」ことであり、それを通じて活動者が自らのなかに何かをつかむということのようである。

宇坪さんによれば、Nさんだけでなく、他の人々も、蔵で手伝い等を行いながら「蔵のなかで遊ぶ」ことを通して自分自身の中で何らかを得て、自分のやりたいものに戻っていった人が多くいるという。「卑弥呼蔵」の地域おこし活動は、様々な人々の心や人生に影響を与えているのである。

おわりに

「卑弥呼蔵」の地域おこし活動は、活動者たちが、蔵保存活動で多くの人々と交流を行うこと

を通して楽しさや充実感を得ている。そして、自らの考え方への影響を受け、生きる上で必要なものをつかんでいる。主宰者である宇坪さん自身も、地域おこし活動で多くの素晴らしい人々と出会うなかで、人のことを心から喜べるようになり、自分の力を精一杯出してみたいと思うようになったという。それらは金銭では得がたいものであり、地域の人々の心を豊かにし、地域の人々の暮らしをよりよくする上で影響が大きいことなのではないかと思われる。

「卑弥呼蔵」の活動形態に見える人々の心を豊かにする地域おこしは、地域の人々が充足する地域おこしの一つとして魅力的に感じられるものである。しかし、一方でこのような活動形態であるがゆえの課題もある。「卑弥呼蔵」の地域おこし活動は、参加者の自発的な活動を基本としているため、活動を継続してもらうことに対する強制力がないということがある。活動参加者が今後何らかの理由で参加しなくなり人数が減った場合には、活動が維持できないという事態も想定される。また、「卑弥呼蔵」の活動形態は、経済的な利益を上げる類の活動ではないため、蔵を保存するために必要な費用をどのように捻出していくのかという点での課題がある。現時点では、蔵募金という有志の人からの寄付金を募ったり、助成金申請を行ったりしているが、それだけでは厳しい状況であり、主宰者宇坪さんや活動者たちも頭を悩ませている。これについては、解決する方法について様々な人々を交えて話し合いを重ねているところである。

いくつかの課題を抱えてはいるものの、「卑弥呼蔵」の地域おこし活動は、閑散としていた三次町に、蔵プロジェクトや赤猫市などで三次内外から人を呼び寄せ、継続的な活気を徐々に創出してきていることは事実である。これまで三次に来ることもなかったであろう若者たちが継続的に三次に足を運び、三次以外の場所に住んでいる三次出身者たちも帰省するたびに立ち寄っている。また、「卑弥呼蔵」で近所の人と大阪の人が出会い、空き家が譲渡されたこともある。

「卑弥呼蔵」の地域おこし活動は、活動者が人々との交流を楽しみ、心を豊かにするなかで、新たに多くの人々をリピートして呼び寄せるという良い循環を一步一步作り出している。「卑弥呼蔵」の地域おこしのような、人々の「心をおこす」地域おこしが、地域住民が充足する地域活性化の姿として現在求められているのではないだろうか。

註

- (1) 山崎涼美「蔵の生命①」[山崎 2011] に蔵を購入したときの経緯が述べられている（山崎は宇坪さんの結婚前の姓）。
- (2) 宇坪涼美さんからの聞き取り調査（2012年2月5日）。
- (3) 宇坪涼美さんが2008年に作成した「蔵プロジェクト文書」に記載。
- (4) 「お宝猫ワークショップ」で作成したパネル文書に記載。
- (5) 註2を参照。
- (6) 註2を参照。（ ）内は著者が加筆。
- (7) 蔵プロジェクト第7回（2013年6月29日～30日）において行ったアンケート調査（140枚配布、回答87枚）による。アンケート調査は、蔵プロジェクト受付で来場者や出店者に配布し、帰る際に受付に設置しているボックスで投函回収した。
- (8) 蔵プロジェクト第6回（2012年9月15日～16日）において行ったアンケート調査（200枚配布、回答78枚）による。
- (9) 註2を参照。
- (10) 蔵プロジェクト第6回および第8回（2013年6月28日～29日）において行ったアンケート調査（80枚配布、回答45枚）による。

- (11) 註2を参照。
- (12) Nさんの事例については、Nさんからの聞き取り調査（2015年9月19日）および宇坪さんからの聞き取り調査（2012年2月5日）による。
- (13) 註2を参照。

文献

- 井上 繁 2002『共創のコミュニティー協働型地域づくりのすすめ』同友館
- 岩本通弥 2003「フォークロリズムと文化ナショナリズム—現代日本の文化政策と連続性の希求」『日本民俗学』236
- 岩本通弥編 2007『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館
- 神崎宣武 1988『「地域おこし」のフォークロア』ぎょうせい
- 神崎宣武 1996a「村おこしの背景」『日本民俗学』206
- 神崎宣武 1996b「日本のムラの五〇年—「地域おこし」を必要とする背景」ヨーゼフ・クライナー編『地域性からみた日本—多元的理解のために』新曜社
- 角本伸晃 2011『観光による地域活性化の経済分析』成文堂
- 清成忠男 1987『地域再生のビジョン—内需拡大と地域振興』東洋経済新報社
- 西村幸夫編 2009『観光まちづくり—まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社
- 堀 啓二 2013「過疎地における廃校利用による地域おこしとコミュニティ形成について」『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』19
- 横村久子 2000「中山間地域における住民参加による地域づくりのプロセス」『奈良県立商科大学研究季報』10（4）
- 森 巖夫・猪爪範子・岡崎昌之・宮口侗廸・西村幸夫 1996『地域づくり読本—理論と実践』ぎょうせい
- 守友裕一 1991『内発的発展の道—まちづくりむらづくりの論理と展望』農山漁村文化協会
- 山崎涼美 2011「蔵の生命①」『中国新聞』2011年12月20日朝刊
- 渡辺 牧 1992「個人生活史に見る草の根からの村おこし—徳島県名西郡神山町の調査研究」『共栄学園短期大学研究紀要』8